

A 水車を作る人々

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

亀山殿の池に大井川の水を引き入れようとして、大井の人々に命じ、水車を作らせた。大井の人々は多くの銭を与えられ、数日かけて苦勞して作り、取り付けたが、まったく回らなかった。あれこれ直したけれど、結局回らず、むだに立っていた。

②の現代語訳

そこで宇治の人々を呼び寄せて作らせると、たやすく組み立てて差し上げたものが、思いどおりに回り、水をくみ入れることはすばらしかった。何事でも、その道を知っている者は尊く優れているものである。

出典：兼好法師『徒然草』第51段「亀山殿の御池」全段

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

A 水車を作る人々

各25点・全体100点 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い〔2点〕

答え：おもう

解説 語中の「ふ」を「う」に直す。

採点の目安 正答2点。

問2 古語〔2点〕

答え：ウ

解説 「大かた」は打消しの「ざり」と結び付き、全く～ないという意味になる。

採点の目安 正答2点。

問3 主語〔2点〕

答え：大井の人々

解説 最初に水車を作った人々が、その水車をあれこれ修理している。宇治の人々が呼ばれるのは②。

別解・許容 大井の土民

採点の目安 正答2点。

問4 目的〔3点〕

答え：イ

解説 冒頭「亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられむ」が目的を示す。

採点の目安 正答3点。

問5 結果の抜き出し〔3点〕 6字

答え：終にまはらで

解説 「終に」は結局、「まはらで」は回らないでという意味。

採点の目安 完全一致で3点。

A 水車を作る人々

各25点・全体100点 | 答えと根拠 | つづき

問6 本文との照合〔3点〕

答え：エ

解説 ②に動作の成功が明記される。材料不足や宇治の修理回数などは書かれていない。
採点の目安 正答3点。

問7 対比〔5点〕 解答例 47字

解答例：大井の人々は日数をかけ修理しても回らなかったが、宇治の人々はたやすく作り、思いどおりに回した。

解説 「数日にいとなみ出して」「とかくなほし」と「やすらかにゆひ」、「まはらで」と「おもふやうにめぐり」を対応させる。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 過程の違い2点／結果の違い3点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

問8 筆者の考え〔5点〕 解答例 49字

解答例：手間や費用をかけるだけでなく、その分野の技術を理解し、仕事を確実に成し遂げられる人を評価している。

解説 結びの「その道を知れるもの」が主張。具体例では、容易に実用の水車を作った宇治の人々が当たる。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 その分野をよく知る人2点／確かな成果を出す人2点／水車の対比とのつながり1点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

B 鬼のうわさ

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

応長のころ、伊勢の国から女が鬼になったものを連れて都へ来たといううわさがあり、そのころ二十日ほど、毎日、京都や白川の人が鬼を見ようと外へ繰り出した。「昨日は西園寺へ参った。今日は院へ参るはずだ。今はどこそこに」などと言いつけている。確かに見たという人もいない。身分の高い人も低い人も、ただ鬼のことばかり言い続ける。

②の現代語訳

そのころ、私が東山から安居院のあたりへ参りました時、四条より北の人は、みな北に向かって走る。「一条室町に鬼がいる」と大声で騒ぎ合っている。今出川のあたりから見ると、院の棧敷のあたりには、まったく通れそうもないほど人が込み合っている。「やはり根拠のないことではなさそうだ」と思い、人を遣って見させると、まったく鬼に出会った者はいない。暮れるまでこのように騒ぎ、最後には争いが起こり、驚きあきれるようなことがいろいろあった。

③の現代語訳

そのころ、全般に人が二、三日病気になることがありましたが、「あの鬼のうわさは、この前触れを示していたのだ」と言う人もいました。

出典：兼好法師『徒然草』第50段「応長のころ」全段

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

B 鬼のうわさ

各25点・全体100点 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い〔2点〕

答え：わずらう

解説 「づ」を「ず」、「ふ」を「う」にする。

採点の目安 正答2点。

問2 古語〔2点〕

答え：ア

解説 騒ぎの末に争いまで起きた場面への驚きやあきれを表す。

採点の目安 正答2点。

問3 省略された主語〔2点〕

答え：筆者

解説 東山から安楽院へ向かう体験を語っている筆者が、人に現場を見に行かせた。

別解・許容 兼好法師

採点の目安 正答2点。

問4 会話と情報〔3点〕

答え：ウ

解説 直後に「まさしく見たりといふ人もなし」とあり、伝え合う言葉に直接の目撃の裏付けがない。

採点の目安 正答3点。

問5 根拠の抜き出し〔3点〕 15字

答え：まさしく見たりといふ人もなし。

解説 「見た」と確かに言う人がいないことを明記する一文。

採点の目安 完全一致で3点。

B 鬼のうわさ

各25点・全体100点 | 答えと根拠 | つづき

問6 出来事の順序〔3点〕

答え：イ

解説 人々の動き、筆者の確認、夕方までの騒ぎと争いの順。鬼の実見は示されない。
採点の目安 正答3点。

問7 判断と根拠〔5点〕 解答例 39字

解答例：院の棧敷のあたりに、道を通れそうもないほど大勢の人が集まっているのを見たから。

解説 「御棧敷のあたり、更にとほりうべうもあらず立ちこみたり」が直前の根拠。実際の鬼を見たわけではない。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 院の棧敷付近の人ばかり2点／通れないほど大勢だったこと3点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

問8 読みの評価〔5点〕 解答例 50字

解答例：大勢の人はうわさを聞いて集まっただけで、筆者が人を遣って確かめても、鬼に出会った者はいなかったから。

解説 群衆の存在は確認できるが、鬼の存在の証拠にはならない。筆者の確認結果まで読む必要がある。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 群衆はうわさによるもの2点／調べても目撃者がいないこと3点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

C 技を身に付けるには

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

技芸を身に付けようとする人は、「上手にできない間は中途半端に人に知られまい。人知れず十分に習得してから人前に出たなら、実に奥ゆかしく立派だろう」といつも言うようだが、このように言う人は一つの芸も習得することがない。

②の現代語訳

まだまったく未熟なうちから上手な人の中に交わり、悪く言われたり笑われたりしても恥じず、平然として熱心に努める人は、生まれつきその才能がなくても、その道で行き詰まらず、いいかげんにせずに年月を過ごせば、才能がありながら努力しない人より、ついには上手の地位に達し、力量が高まって人に認められ、並ぶもののない評判を得ることになる。

③の現代語訳

世に名高い名人であっても、最初は下手だという評判もあり、ひどい欠点もあった。しかし、その人がその道の規則を正しく守り、それを大切にして勝手気ままにしないので、その道の熟達者として多くの人の師となることは、さまざまな技芸で違いはないはずだ。

出典：兼好法師『徒然草』第150段「能をつかむとする人」全段

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

C 技を身に付けるには

各25点・全体100点 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い〔2点〕

答え：ならい

解説 語中の「ひ」を「い」に直す。

採点の目安 正答2点。

問2 古語〔2点〕

答え：エ

解説 力量が高まった後の評判を述べるので、才能や技量が認められるという意味になる。

採点の目安 正答2点。

問3 人物の主張〔2点〕

答え：ア

解説 人知れず十分に習ってから人前に出れば立派だ、という考え。筆者はその考えを支持していない。

採点の目安 正答2点。

問4 筆者の評価〔3点〕

答え：イ

解説 「かく」は直前の人々の考えを受け、筆者はそれでは習得できないと批判している。

採点の目安 正答3点。

問5 対比の抜き出し〔3点〕 9字

答え：堪能のたしなまざる

解説 語注の「堪能」と打消しの「ざる」を組み合わせで捉える。

採点の目安 完全一致で3点。

C 技を身に付けるには

各25点・全体100点 | 答えと根拠 | つづき

問6 具体例の働き (3点)

答え：エ

解説 名人も初めは下手であったが、規則を重んじて学び続けたことを示し、②の主張を支える。
採点の目安 正答3点。

問7 条件の説明 (5点) 解答例 48字

解答例：未熟なうちから上手な人に交わり、笑われても恥じず、いいかげんにせず熱心な努力を長く続ければよい。

解説 「上手の中にまじりて」「恥ぢず」「たしなむ」「妄にせずして、年をおくれば」が必要な条件。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 上手な人に交わる1点／笑いや批判を恐れない1点／いいかげんにせず努力を続ける3点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

問8 全体の要旨 (5点) 解答例 53字

解答例：才能や最初からの上手さよりも、未熟さを隠さず他者の中で学び、その道の規則を守って努力し続ける姿勢が大切だ。

解説 人知れず完成してから出るという考え、才能があっても努力しない人、規則を重んじた名人を対照させる。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 才能だけで決まらないこと1点／未熟な時から人に交わること2点／規則を守る継続した努力2点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

D 流れる水と人の暮らし

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

流れていく川の流れるは絶えることがなく、しかもその水は以前と同じ水ではない。よどみに浮かぶ泡は、一方では消え、一方ではできて、長くとどまることがない。世の中にある人と住まいも、またこのようなものだ。

②の現代語訳

美しい都の中で、棟を並べ瓦屋根の高さを競っている、身分の高い人や低い人の住まいは、代々続いてなくならないようであるが、本当にそうかと調べると、昔あった家は少ない。ある家は去年壊れて今年は建てられ、ある大きな家は滅びて小さな家となる。住む人もこれと同じだ。場所も変わらず人も多いが、昔見た人は二、三十人の中でわずか一人二人である。朝に死に、夕方に生まれるという世の常は、まさに水の泡に似ている。

③の現代語訳

分からない。生まれ死ぬ人は、どこから来て、どこへ去るのだろう。また分からない。一時的な住まいを、誰のために心を悩ませて造り、何によって目を喜ばせるのだろう。その住人と住まいが、どちらが先かを争うように変わり去っていく様子は、いわば朝顔の花と露にほかならない。ある時は露が落ちて花が残る。残るといっても朝日で枯れてしまう。ある時は花がしぼんで露がまだ消えない。消えないといっても、夕方まで残ることはない。

出典：鴨長明『方丈記』冒頭「行く川のながれ」から「ゆふべを待つことなし」まで

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

D 流れる水と人の暮らし

各25点・全体100点 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い〔2点〕

答え：いわば

解説 語中の「は」を「わ」に直す。
採点の目安 正答2点。

問2 指示語〔2点〕

答え：イ

解説 流れる水も泡も同じ状態にとどまらない。それを人と住まいに重ねている。
採点の目安 正答2点。

問3 本文の対比〔2点〕

答え：ウ

解説 「所もかはらず、人も多かれど」と「いにしへ見し人は…わづか」を対比する。
採点の目安 正答2点。

問4 根拠の抜き出し〔3点〕 10字

答え：昔ありし家はまれなり

解説 外見上は住まいが続くように見えても、個々の家は変わっていることの根拠。
採点の目安 完全一致で3点。

問5 疑問の働き〔3点〕

答え：イ

解説 一時的な住まいのために心を悩ませる意味を、無常の観点から問いかける。
採点の目安 正答3点。

D 流れる水と人の暮らし

各25点・全体100点 | 答えと根拠 | つづき

問6 比喻 (3点)

答え：ア

解説 露と花のどちらが先でも、残る方も朝日や夕方までには消える。

採点の目安 正答3点。

問7 現代語訳 (5点) 解答例 34字

解答例：流れていく川の流りは絶えないが、しかもその水は以前と同じ水ではない。

解説 「本」は以前の。「流れ」が続くことと、流れる個々の「水」が入れ替わることを両立させる。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。字数の下限は設けない。必要な意味を保つ簡潔な訳も認める。例：「川の流りは絶えず、しかも元の水ではない。」

採点の目安 川の流りは続く2点／その水は同じではない3点。内容点を合計後、上限字数を超えた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

問8 比喻と主題 (5点) 解答例 53字

解答例：人も住まいも同じままではなく絶えず移り変わり、どちらかが先に失われても、残った方も長くはとどまらないこと。

解説 冒頭の流れと泡、末尾の花と露は、どちらも人と住まいの無常を具体的に示す。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 人と住まい双方の変化2点／先後にかかわらず残る方もはかないこと3点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

出典と表記について

古典原文の出典 | 現代語訳と解説は独自作成

本文は保護期間が満了した古典作品の原文です。Wikisourceの旧刊底本に基づく公開本文で確認しました。現代の翻訳・注釈や既存の試験問題は転載していません。

A 水車を作る人々

兼好法師『徒然草』第51段「亀山殿の御池」全段

底本：國文大観 日記草子部

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_\(國文大観\)&oldid=240239](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_(國文大観)&oldid=240239)

B 鬼のうわさ

兼好法師『徒然草』第50段「応長のころ」全段

底本：國文大観 日記草子部

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_\(國文大観\)&oldid=240239](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_(國文大観)&oldid=240239)

C 技を身に付けるには

兼好法師『徒然草』第150段「能をつかむとする人」全段

底本：國文大観 日記草子部

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_\(國文大観\)&oldid=240239](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_(國文大観)&oldid=240239)

D 流れる水と人の暮らし

鴨長明『方丈記』冒頭「行く川のながれ」から「ゆふべを待つことなし」まで

底本：丸岡桂・松下大三郎共編 國文大観9 日記草子部 板倉屋書房 明治36年

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=方丈記_\(國文大観\)&oldid=240182](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=方丈記_(國文大観)&oldid=240182)

本文の扱い

一部の旧字体を現行の字体に改め、踊り字を文字に開き、底本の割注・ルビを除きました。歴史的仮名遣いと語句は原則保持しています。段落分け・番号は教材用です。底本の違いにより、学校の教科書の本文と異なる表現があります。参照確認日：2026年10月7日。